

遊牧の雑草

執筆：甲賀綏一、甲賀あや

解題：甲賀真広

編集：甲賀真広、森巧、梅村卓、大野太幹

解題

「遊牧の雑草」は、甲賀綏一（やすかず）、綾子夫婦によって書かれた手記であり、結婚 50 周年を記念して 1964 年に作られたものである。当該手記には、2 人のアメリカ、満洲への移住や引揚げ後の生活などが綴られている。本解題では、本手記の内容を概観した上、その史料価値を簡単に紹介する⁽¹⁾。

1 概要

「遊牧の雑草」は、金婚式を記念して、甲賀綏一、綾子夫婦によって 1964 年に書かれたものである。手記は全部で 22 頁（1～6 頁を綏一、7～22 頁を綾子）、約 2 万 5000 字から構成されており、B5 版で製本されている。付記の「金婚式の年にあたって、無理に頼み書いて貰った」からもわかるように、作製に至った背景には七男春明の頼みがあったという。実際どれほどの部数が作製され、その費用がどうであ

ったのか、さらに誰に配布したのかについては不明であるが、おそらく親族や友人に配布するために作製されたものであると考えられる。

なお、筆者が所有している手記は、五男和彦（筆者の祖父）より譲り受けたもので、和彦の他界（2018 年 3 月）を受け、遺品整理をしている際に見つけたものである。

(1) 執筆者の略歴

ここではまず執筆者 2 人の略歴を紹介する。

甲賀綏一は 1886 年 2 月に千葉県君津郡秋元村市宿（現在、君津市）にて生まれた。大成中学で学んだ後、1905 年にアメリカへ渡り、サンフランシスコ市ヘイト街基督教青年会に入会し、これを契機にキリスト教の牧師になるという道を選んだ。1916 年にサンフランシスコのサンセルモ神学校に入学、1919 年に卒業、南カリフ

オルニア州ランポーク日本人教会に赴任した。その後いくつかの町で牧師を経験したが、アメリカで起こった日本人に対する排斥運動を受け、1925年に日本へ帰国することとなった。日本に帰国し数ヶ月後には、満洲の安東へと移住した。安東教会の赴任は日本基督教会の総主事をしてきた小林誠牧師による紹介だったようである。安東では牧師の他に、安東中学校と安東高等女学校で英語教師としても勤めていた。敗戦から1946年9月の引揚げまでの間にも、満洲各地から引揚げのために集まった日本人のキリスト教信者と共に、自宅である牧師館の2階で礼拝を行っていたという。引揚げ後には保田教会(千葉県保田町)に赴任し、また石川四郎牧師の薦めで1951年から1961年まで高岡教会(富山県高岡市)でつとめていた。そして、1967年2月に他界した。

綾子は、1896年に千葉県木更津で生まれ、本名は(戸籍上)あやである。綾子の父は医者であり、キリスト教徒でもあった。そのため、幼い頃から信仰を守るよう育てられていた。綾子が女学校を卒業してから1年後、木更津教会の宮田熊治牧師の紹介で綏一と結婚した。当時、綏一はアメリカにいたが、1915年にサンフランシスコで「パナマ大博覧会(サンフランシスコ大博覧会)」が開かれることになり、日本との連絡や準備のために一時帰国をしていた。挙式は1914年7月29日、木更津教会で執り行われた。結婚後に綾子も渡米し、そこでは7人の子供を出産し

た。また、1925年に満洲へ渡ってから、5人の子供を出産している。綾子の仕事に関する記述がなく、専業主婦として家事や育児を中心に行っていたと考えられる。引揚げ後には、保田教会、高岡教会にも連れ添い、晩年には綏一とともに武蔵野教会(東京都豊島区)の礼拝に参加していたという。

(2) 内容

本手記は、大きく「日本の生活」、「アメリカの生活」、「満洲の生活」、「引揚げ後の生活」の4部から構成されている。「日本の生活」では、それぞれが両親からどのようなことを教えられたかや、渡米の背景などを中心に書かれている。「アメリカの生活」では、綏一の学生時代の思い出や、アメリカ各地を伝道していたことが記されている。「満洲の生活」では安東教会での牧師生活や、その傍らで安東中学校と安東高等女学校で英語教師としても勤めていたことが書かれている。「引揚げ後の生活」では、米軍航空基地の高野組の通訳として働いたこと、保田教会や高岡教会で牧師として赴任したことが回顧されている。

ここでは、筆者の関心である「満洲の生活」に着目して、その内容をもう少しみて見る。綾子は、「満洲の生活」の中で子ども一人一人の状況に即して回想している。例えば、「クリスマスも近くなると、さすがに寒さは厳しく、ペチカに朝晩石炭をたいても二重ガラスは氷りつき、外は全

くみえなかった。人の出入りが多いと温度が下り、満洲の気候になれぬ為、満里子は前年(大正十五年)五月に生れていたのだが、遂に風邪をひき、手当てをしたがとうとう肺炎になり、小さくて抵抗力のない為か、それまで一度も病気をしなかったのに、わずか8ヶ月で又も惜しい生命を亡くしてしまい、かわいそうな事をした」と回顧し、家族でキャンプに行ったことについては「正典、純男は中学時代、隣の老岐一郎君や、緒方君等と朝鮮の白馬にキャンプに行った。テントは正典がミシンをかけて造り、食料を持って出かけ、二、三泊した。その間にパパは小さい子供を連れて訪づれ白馬川で皆で泳いだりした」と語っている。また、敗戦後のことについては「恵美子、暁子も看護婦に出される恐れがあったが、中共の女官で中共に協力して翻訳の仕事をしていると云う証明の為、のがれる事が出来た」と回想している。綾子の記述からは、一日本人家族の安東生活ばかりでなく、牧師の妻としての視点や、1人の母親として時々の思い出や苦悩が窺い知れる。

2 史料的价值

最後に本手記の史料的价值について簡単に述べる。

本手記は、日本、アメリカ、満洲で生活を経験した綏一とその妻綾子によって書かれたものであり、満洲研究や移民研究、キリスト教史研究にとっても一手がかりになりうる史料である。そして本手記の

一番の特徴は、2人の視点から回想していることにある。それぞれの記述を比較してわかる通り、同じような生活をしていても、視線や内容は大きく異なる。本手記において、綾子の妻として、母親としての目線から多く書かれている点が特に興味深い。従来、満洲体験や戦災の記憶は男性目線で語られることが多い。本手記のように、女性としての視点が加わることで、当時の生活の様子がより多様に浮かびあがる。また、2人(あるいは甲賀家)にまつわる関連史料は他にもいくつかある⁽²⁾。これらの史料を相互対照することで、当時の状況をさらに分析できるばかりでなく、家族の記憶継承などについても分析することできよう。これらを今後の課題とする。

(1) 本稿の詳細な内容については甲賀真広「ある牧師の国際移動と教会ネットワーク——アメリカ・満洲・日本」佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年を参照されたい。

(2) 手記には甲賀綾子『遍歴』私家版、1952年や甲賀純男『日系同胞10年の旅路』キリスト出版社、2001年、綾子の兄の手記、牧野正路『私の生い立ち』私家版、1987年などがある。他にも、引揚者団体である安東会が発行する『ありなれ』にも掲載されている。石川光子「丹東(旧安東)を訪ねて」『ありなれ』41号、1977年。甲賀綾子「近況あれこれ」『ありなれ』22号、1978年。甲賀恵美子「中国丹東を訪ねて」『ありなれ』41号、1977年。甲賀和彦「父甲賀綏一と安東教

会』『ありなれ』55号、2011年。甲賀和彦「純男兄の思い出』『ありなれ』49号、2005年。甲賀和彦「五十年ぶりの丹東訪問旅行』『ありなれ』41号、1997年。甲賀ジェームズ「神様の世話』『ありなれ』41号、1997年。甲賀純男「子供に

なって旅を楽しむ』『ありなれ』41号、1997年。甲賀ドーラス美代子「中国丹東を訪ねて』『ありなれ』41号、1997年。甲賀正彦「1996年9月8人の中国の旅』『ありなれ』41号、1997年。

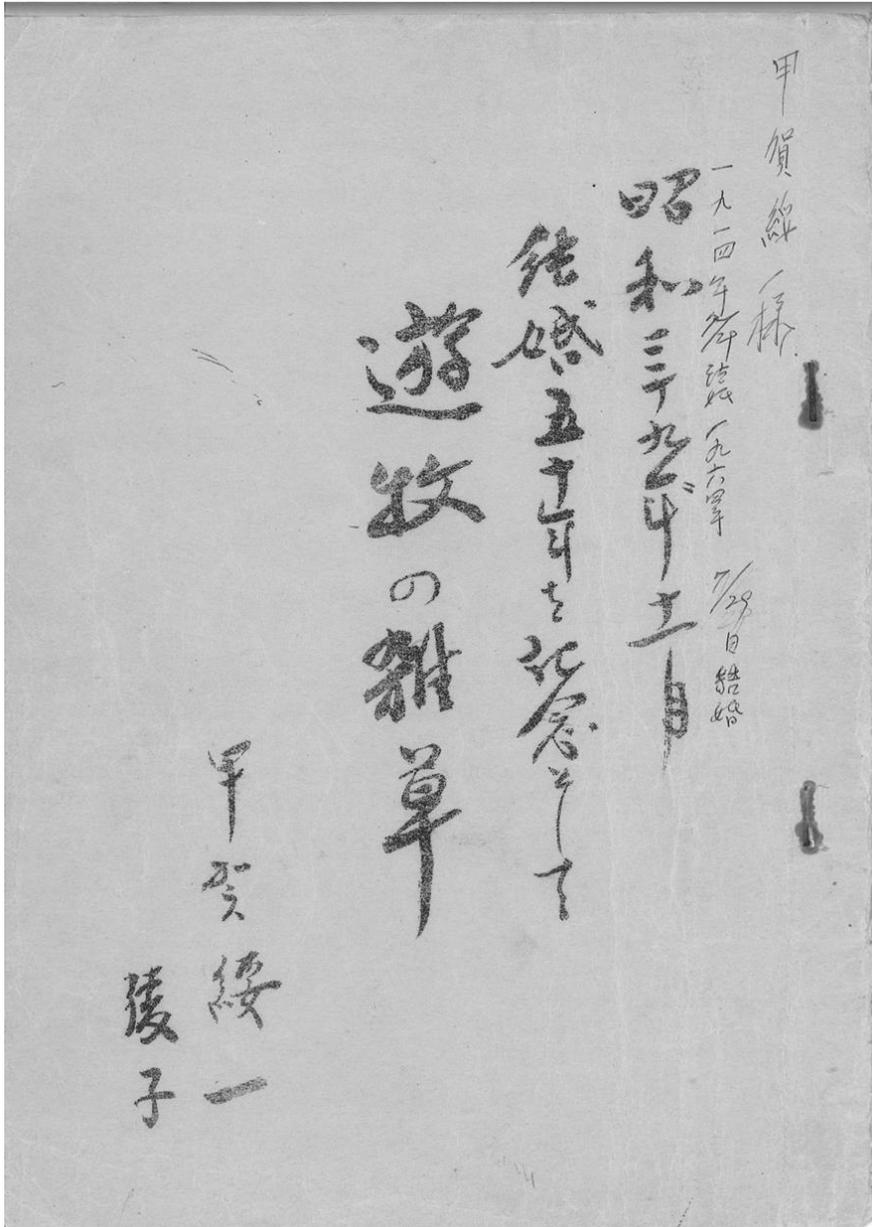


図1 「遊牧の雑草」表紙



▲ 甲賀ファミリー（安東時代最後の全員写真）1934年（S9年）

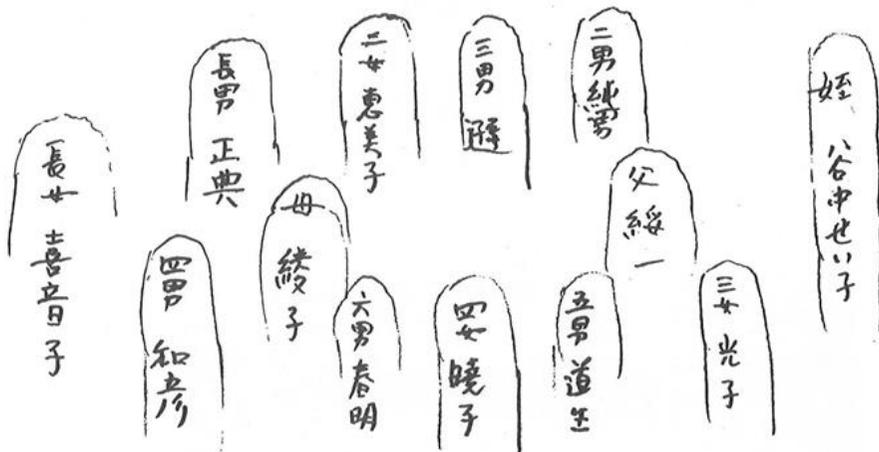


図2 家族写真（『ありなれ』49号、115頁より）

本文

凡例

- ・旧字体や異体字、略字、旧かな使い等は、史料の性質を考え原文のまま掲載した。
- ・誤字と思われる箇所はそのまま掲載し、句読点、空白、改行は適宜記入した。
- ・各史料名は編集者によってタイトルを付した。

甲賀綏一の手記

金婚の年を迎えて こしかたの 山坂
多き道も みめぐみ

七十八年分の生涯を省みると、あれやこれやと在りし月をよび起しては、短いようで又長くもあったと思えるが、忘れっぽい自分でも自分の事は自分より知らないで神の恩寵の中に抱かれ、今日ある自分の有難き感謝の思いを何らなす事のなかった生涯だったが、回顧の一端として極めて断片的で取り止めもない事柄であるが、記憶をたどってちび筆の跡をのこして恥の事がきにする。

明治十九年と云えば基督教が日本に伝えられて最も隆盛になり、この分なら全国は間もなく福音化されるのではないかと、基督者の意気こんだ年であった春二月に千葉県鹿野山裏の麓、市宿に生を享けた。母親は浄土宗から禊協に改宗し、上名柄の道に信仰を高め、熱心になり、健康を増進し、婦人伝道師となり、八十二才で

死去するまでに二千人の信者を導いたと云われた。四十二才の時に末子として自分が生まれた。修養会があれば何時も膝に抱かれながら、「おほらい」を聞かされた。父は六十二才で、私の九才の時に死んだ。父の記憶は、殆どないが死の数日前、遊びに夢中になっている私を呼んで、「綏一足をさすれ、お前は年より子だが、あまえないで母のいいつけを守り、しっかり勉強して安心させよ。」といわれたことだけが、記憶にあるのと、葬儀の時、当時のハイカラ婦人の姉が私のため毛糸で色のついた服を編んで着せられたのはつっぽうばかり着ている子供らの中で、はずかしくて着るのがいやでたまらなかった事だけ覚えている。商売の関係で幼時時代、東京に同伴されて、行った時、只一つ覚えている事は、四五才の頃、婆やに連れられて、両国橋の上から川蒸気船の航行するのを見たのが忘れられない。東京には汽

車もないので、東京湾を会社の小さい汽船が交通機関であった。小学校四年の時に始めて、オルガンが置かれ、水野先生が口をとがらせて。何かうたったことと、何かのはずみで、三人の友人と学校に行かずに弁当を腰にして、鹿野山に遊んで、母にこっぴどく叱られたことは忘れられない。高等二年を卒えて、田舎では始めて親戚の世話で神田の大成中に学んだ。叔父の家から通学した当時、明治三十二年の頃は電気もなく鉄道馬車が銀座を走っていて、丸の内は三菱原で狸が出ると云われたものだ。一九〇五年隣家の星野乙一郎氏が米国で医学を修め、横濱で検疫官をしている事に励まされ、渡米したく六十二才の母に希望を話したら承諾したので、十九才業を終えると、渡米の支度をした。尤も日露間の国交の緊迫もあり、徴兵される恐れもあったので、母も賛成してくれたふしもある。同航青年二十余名で「ドウリック号」六千トンで三週間もかかって、希哇經由桑港市向った。航海中、日露国交断絶して、黄海にて、日本の勝利を知り、船中祝会で、賑わった。二月下旬、ヘート街基督教青年会に同航の荻野と落ちついた。漠然と英語もわからない向う見ずの青年を青年会は極めて懇切に指導してくれた。会長のストウジ博士は長老教会の総理で、青年を愛し、身を以って福音を実証しつつ、聖書研究、英語教授に力を致してくれた。博士の人格的感化に由り、幾多の青年が、社会に又宗教家として世に送られている。自分も誘惑の多い、米

国では基督教信仰こそ能力であるのを知り、禊協からはなれてはならんと固く誠められたのを捨て、一九〇六年九月に現にハワイ、マウイ島で伝道している渡辺玉作君と受洗した。親の許をはなれ、自活しつつ、勉学せねばならぬので、今日で云うアルバイトに相当の苦勞もして、グランマスクール、ハイスクール、カレッジコースと順調に進み、夏季には休暇を利用して、農園の果実採集に年毎に行った。また夏休みを利用して、国吉君と国立公園ヨセミテ—溪谷に、自転車二百五十マイルを走り、三週間山中テントをしながら観光した事は生涯忘れ得ない事であった。特に四千呎のヨセミテ滝の落下のとどろき、一万数千呎のクラウドレストの山頂に立った爽快さは天下を取った心地でした。青年会での思い出は学生奨励会を組織して、青年会から援助を求めたり、クリスマスには青年会の特色行事のシエクスピヤ劇を毎年上演しては、日本人に称賛された。主役は医学校に通学していた檜原であった。一九〇七年に旅順口が陥落してまもなく、日本が勝利に終わった時には、桑港の町を活歩したもので、日本人である誇りをしみじみと味わった。前掲の渡辺君が、青年会の主事を辞し、神学校に学ぶことになったので、ストウジ博士の命により、後任として、主事に就任した。一九一〇年、桑港大震災には会館の下まで焼けたが、無事のため救済に役立ったのを覚えてる。教会としては、執事、長老となつて、渡辺徹、寺沢宮崎何九

も、小平氏等と教会運営に当たり、青年会としては苦学生年のオアシスとして、渡米する青年や留学生の世話ができて喜ばれ、楽しい働きであった。一九一五年パナマ大博覧会が桑港に開催されるので、日本との連絡や、その他の準備もあるので、渡米十年で祖国を訪問のため、帰国した。日本の著しい進展におどろいた。

郷里迄既に汽車も通じていた。在任中、日本国威の発揚と共に、間もなく労働党が先棒となって米国日本人の排斥運動が盛んになり、公立学校より日本人入学拒否、布哇より渡航者禁止、農業への圧迫、等々すさまじい排斥運動が加州全面に広がった。新日米人は心を痛め、其の誤解を正すため教会に訴えた。ストウージ博士らは労働者の避難もものともせず、敢然彼等に抗して講演会を諸所に開いて日本人を援護した。自分も博士のお伴をして、先棒をかざいたものだ。帰国の際には母を始め、肉親友人らに歓迎されて故郷入りした時は嬉しかった。母は帰京する前結婚する様すゝめるので、自分もそれに従い、相手が基督者ならばと条件つけて承諾した。いろ／＼と世話する方もあったが、木更津教会宮田牧師の媒介で現在の妻綾子と一九一四年七月二十九日、忘れもしない酷熱の日、教会で宮田牧師の司式で挙式した。両親姉兄は木更津教会の有力な信者である。十一月には滞在期間も切れるので友人、国吉夫人と後より渡米する事にして、寂しく単身帰米した。翌年は大博覧会で寧日もなく、会務に迫

われた。春になって綾子が渡航して来たので、喜び迎えて青年会の仕事を理解してくれて労苦を分けあった。

長男が大正天皇即位の日一九一五年十一月一日に生まれたので正典と命名した。青年会の主事も意義がるが、直接伝道したい欲望も出たので、ストウージ博士に話すで大賛成で、家内も同意してくれたので主事を辞し、翌年、桑港長老派神学校に入学した。家族をかかえての勉学は相当無理もあったが、必要物資は与えられ、三年間、米人学生の中に借家して二回夏期伝道のためウォナッツ・グローブ、ハンフォードに赴いた。在学中に次男が生まれた。同級生が御前の後継者にせよと祈ってくれた。幸い意、純男はシカゴ市長老派マッコミック神学校を卒え、目下、私が五年間伝道したワッソンヴィル教会牧師として三人の子供を与えられ伝道している。

神学校生活はまことに楽しかった。校長ランドン博士は日本人学生を愛された。理由の一つとして、云われた事は日本人は卒業して凡てが一貫して伝道者として働いてるので学校の誇りだと朝鮮併合後の日本政策が宣教師に対して好感を持たず、むしろ圧迫したので、事の真偽を交えて学校で報告講演する時には、常に日本の立場を正解して吾らの同情者であった。一九一九年春、卒業すると間もなく、桑港中会で按手札を領じ、教職につき。直にランボウク市日本人教会に赴任した。同教会は白人長老教会牧師マッケーン氏が日

本人の伝道のため教会員を動かし、及川牧師を迎えて始めたが、数年にして同氏が辞任して帰国したので後任として赴き、一年の跡には、より多数の同胞の居るガタルーペ市の開拓伝道に転じたが、仏教の本陣で、伝道には苦勞多くして、三男を失い、悲しい経験をしたが、たまたま沿岸での有力なワッソンヴィル教会に招かれて、赴任した。

同級の伊藤君はロスアンゼルス近くのロングビーチ教会に招かれ、鈴木君は帰国して中学校の英語教師をしたが兩人とも故人となった。五年間楽しく伝道し、会堂の増築、ボーイスカウトの編成、自動車を購入しては、近郊市サリナス、モントレイ両教会と相提携して教勢の進展を計った。モントレイ教会小北牧師と小崎道雄氏の帰国を前に風光明媚の十七哩ドライブやアシロマに於ける長老派の大会等は楽しい思い出であった。

此の間大人の子供を与えられ、米国に骨を埋める覚悟であったが、二世以降の民族的発展を思うと、日本人としての誇りを背景とせねば、自然消滅の恐れあるを知り、子供らを日本にて教育してせしむるにしかずと考え、同労者のはんたいにもかかわらず、長男次男小学校四年と三年を頭に、四人をつれて、一九二四年八月、二十年の米国生活を後にして感無量の中に春洋丸の二等室、家財道具一斉と共に乗船して、桑港灣を最後と、地平線上に消えるまで見つめて別れを惜しみ途中ハワイを見物して二週間にして横浜に着

いた。大震災に傷ついた悲惨な姿におどろいたが、暖い肉親多数に迎えられ、郷里、市宿に落ちついた。

「綏一が帰国したら信者になる」と待っていてくれた母は一年前に世を去っていたのは寂しかった。九月になって、木更津市の牧野両親が準備して下さった海岸近くの借家に移り住んで、長男、次男を小学校に入学させた。十一月になって当時日本基督教会総主事、小林誠君が同窓の故をもって、先輩として、徳島、外、二三伝道地を推薦してくれたが、植民地気風が米国大陸と相似たる点のある満洲国安東市の安東教会の招へいを受けて一九二四年十一月多数の会員に迎えられ、大人の子供と落ちついた。牧師館も整っていて住心地もよく会堂は木造建で、会員は六十余名で在留同胞は一万余人で悉く日露戦争後の移住者であった。周囲には女学校、小学校二、三寺院もあって文化の中心でもあった。

満洲は日本基督教会と組合教会とが主な伝道戦線をはって居た。大連には先輩三吉牧師、奉天には山口牧師等があつて、協力して福音宣教に励んだ。此の間、恩師ストウジ博士の再度日本訪問を迎えて、新義州で講演会を開催した。博士は多年日本青年の指導と、日米親善に尽力した理由で、勲五等旭日章と日本教育会の終身名誉会員にせられた。又満洲事変には軍部の策謀の故を知ると、痛心事であった。捕虜の多くは悲惨な私刑で殺された。伝道も順調に進展し、会堂の増築もし、S・

Sの生活も七、八十名にもなった。傍中学校と女学校の英語教師を多年、勤めたので、多くの便宜も与えられ、子供四人をも与えられ、長男次男は中学校生活と同時に相次いで渡米させ、長男は大学を卒えると電気技師として現にシカゴ市に、次男は前掲の如く伝道師としてわたしの勤めた教会に牧会伝道している。大東亜戦争と共に親米家と目され、中学校を辞するに至ったが米国を知っている私が日頃考えている如く敗戦の結果となったのは悲しかった。昭和二十年終戦となり、昨日に代ってあわれな多数の難民が安東を目ざして引揚げて来るのを有志と協力して二十一年九月に帰国するまで世話をして帰らせたが、同胞全部が荷物を手放して生活するみじめさであった。大切な書物全部も売却するも止むなきに至った。ソ連軍が進駐した時には、日本人の工場の機械、個人の目ぼしい家財道具は殆んど没収して本国に輸送した。過日救済事務所に三人と居ると、ソ連の中尉三人が酒気を帯びて這入りこみ、ピストルを一人一人の胸にあてて、金と女を出せと驚かした。周囲の婦女子は恐れて姿をかくした。若い中尉が私の胸にピストルを押しあてていたが、旅の苦労や故郷の母の事を英語で同情を以って話していたら、パさん悪かったと銃をおさめた。愛と同情をもって接すれば習慣のちがったあれくれの軍人も心をやわらげると教えられた。菓子、南京豆、ビールをたらふく飲食し、そくばくの金を手にして帰ったの

で、一同ほっとした事もあった。人民解放隊を組織した日本共産党員がやって来て、順次帰国の手を打ってくれたので、二十一年九月一人五阡円の船賃を出して、持金一人壹阡円の制限で聖書一卷と、僅かな着替えと、自分の食料をリックに各自背負うて鴨緑江をジャンク船で一行五百三十人と共に仁川に向って出航した。

之らの諸費用は中共軍に勤務の関係で、一年間残留した三男遜の調達であった。百トン足らずの船におしずめ、身動きもできできない窮屈さであった。汽船なら一日の航行で足りるのに風がなければ二日も三日も動けないジャンクの事だから十一日も要したので食料の欠乏をきたして、危険な窮状に陥った。漸く仁川港外に着いたが、海が浅いので入港できず、小舟で迎えて貰わねばならぬので、交渉のため鮮、支、英語のできる三人の中の一人におされて、ボートで出発したが、波高きため、航行不能のため引き返した処、幸い鮮人の小汽船の航行を見つけ懇願して、乗船させてもらい、仁川港の警備隊に行き、事情を話して、依頼した処、「時間外だから明日にせよ。」と鮮兵の拒否にあったが、米兵の上官に窮状を訴えたら「よし上陸用の舟艇を出せ」と四主人の兵隊に命じてくれて、直に出航して、女子供が第一だと、一人一人をかゝえて浅橋に押しあげてくれた事は、ソ連兵に苦しめられて来た一同には余りにも異なった扱いに、おどろいたことであった。空腹には、温かいうどんの夕食で大満悦で、生きかえった

と感謝していた。其夜のうちに、貨車で、京城に送られ、南山中腹の西本願寺に二キロばかりの市街をリュック背負った難民の姿は敗戦のみじめさを知らない日本人の痛ましさをたどりついた。時計のくさりや、帯などを鮮人に売って、焼きいもを買って食した時のうまさは忘れられない。収容所に入って安心したのか、急に病人も出来、多数の死者も出た。一週間検疫の後、貨車で釜山に送られ、「大隅丸」にて博多に上陸したのが十月二十七日であった。得も云われない安堵の思いに充たされた。

二日の後引揚者に乗って、一路東京に向った。広島、神戸と打ちのめされた敗戦の後を見て、感無量であった。郷里市宿の生家に温かく迎えられた。内地の教会の多くは戦災で焼失したので、引揚牧師を迎えてくれる空きもないので、生活のため、一ヶ月後、木更津市に移り、井上某の推薦で、米軍航空基地の高野組の通訳となり、主として、各地に墜落した飛行機の収集に米兵と共に艀艦に乗船して東京湾より遠くは伊勢湾、名古屋、三河、鳥羽と数ヶ月に亘って愉快的航海でした。伊勢神宮にも米兵をつれて参詣したが、昔とは打って変わって日本人は観光気分で俗歌を口ずさみ、そびゆる樹木の評価をしながら散歩する姿は勝利に導いてくれなかった日本の神様に対する腹いせの様子も見えた。船中生活も一段落ついたので木更津に帰り、伝道の手伝いもしたが保田教会より招かれたので三年にして辞し

て鋸山麓の同教会に一家を挙げて赴任した。此の間四女暎子は東洋英和保育短大に学んだ。東京教区に訴えて、館山に開拓伝道を開始し竹岡教会の兼牧をもして数年を経過してる時に、石川巡回牧師のすゝめで北陸の高岡教会に昭和二十六年十二月に赴任した。有力な若い牧師が教会所属保育園の園長と何かにつけて折り合いがつかず、苦盃をなめて辞任せざる得ない問題のある教会故、年配の私が何とかできるだろうとの配慮もあつたらしく着高の夜、長老三人が口をそろえて教会伝道の癌である保育園の問題を陰々に改善してくれとの話にはいささか面くらった。日を経るにつれて事情も理解し、見当もついたので、氷見、出町、新湊、伏木の伝道の傍ら五年がかりで、漸く解決ができ保育園は実質的に教会直属となった。高岡教会在任九年数ヶ月七十五才の老齢で寒い北陸に長くおくに忍びないとの子供らの意見と在米の二人が相次いで、六年前帰国の時に応援してくれて求めであった現在の土地に信仰の友興利工業の会社梶元成氏夫妻の力ぞえで、小さい住宅を建ててくれたので、幸い、武蔵野教会熊野先生夫妻が同教会副牧師斎藤昭夫氏を私の後任に推薦して下さったので、後事を委ねて三十六年一月隠退して、六男春明と現住所に移り住んだ。顧みるに海外生活四十一年、教会伝道五十余年の間基督者として導き入れた兄弟は姉妹の数は母が禊教に導いた二千人の半数にも足らなく、多くの躓きも与え、豪慢不遜主の御

心を痛めし事も数えることも出来ない。徒に聖名を穢す生涯であったにもかかわらず、今日まで必要あるものを与えられ、十人の子供らも信仰の中にありて基督者として各自許されている持場にて、家庭生活を営んでいてくれる事は云い知れな

い感謝である。主の恩寵と信仰にありて交わる多くの兄妹姉妹たちの祈りの賜と衷心より感謝するものであります。

むつみあい、五十路の坂を越えぬれば、天国の空は金色のごと（やすかず）。

甲賀あやの手記

オリンピックを初めてアジアの日本で開催する事になり待ちに待っていたが、今や最高潮に達し、手に汗を握る場面が展開されているが世界の若人の厳しい訓練を経て、優勝をめざしての熱戦ぶりに驚嘆するばかりである。毎日テレビを見ても胸のすく思いがする。

此年丁度結婚して五十年。顧みて今までさゝえられて来たことは、神の深い御恵みと長い旅路の中に、数多くの温かい人の力添えがあったればこそと、感謝の思いで一杯である。私は明治二十九年木更津で生れ、父は医者をして居り、兄一人姉二人、自分と弟の五人兄弟であった。父は明治十九年キリスト教に入信して洗礼を受け、七十八才死する迄、信仰一路邁進して、其頃、異端者扱いされて随分苦勞したようであった。が、少しも妥協する事もなく、キリストの僕たる事を、最上の光榮として、この世の名誉や富に目を向けず、子供の教育にも神第一と、与えられた身体も大切にして神の御用に、仿られる様、教えてくれた。母は口数の少な

い人目には余り目立たない地味な性質で、よく父に仕へ、子供にもぜい沢な事はさせず、細かい注意はよく教え、どんな忙しい時にも一人聖書を読み、祈っていた。父が重病の患者があり、呼ばれて行った後は、必らず二階の静かな部屋で、熱心に祈りをさゝげていた事が、思い出される。

小学校六年生の儂、明治学院を卒業して、すぐ、奥様を同伴して宮田熊治先生が、木更津教会に来られて、日旺学校から、結婚して、米国に行くまで、お世話になった。十六才の時。石原傳太郎先生が、応援伝道に来られた折、先生から受洗した。女学校を卒業して、一年後に、宮田先生の司式で木更津教会で千九百十四年七月二十七日結婚式をあげた。

宮田牧師は其頃、サンフランシスコ市のキリスト教青年会の幹事をしていた甲賀を、文を通じて結婚の話があった。私に考えておくように、申されたが一度も見た事も、話した事もなく、返答に困り、父は信者でその様な仕事をしている人であれば大丈夫、米国へは、なか／＼望んでも、

行けない処だし、羨ましい位だと一人で喜んでた。自分は、無我夢中で、あったが信頼する先生や、父兄も賛成であるし、そのまゝ、とん／＼調子に話が進んで、一ヶ月もたたないうちに、式をあげてしまった。初めは、一緒に渡米するつもりであったが、其頃、トラホームと十二指腸の検査が、やかましく、眼の治療のあとが残っているとので、自分だけ通過出来ず、十月に夫は先に渡米し、淋しく残された。一人行くのが、不安なのか、友人の奥様と来る様に、言い残していったが、結局、其年の十二月、春洋丸に乗船して一人、行く事になった。其の時、父が、横浜まで、見送りにきてくれ、気丈な人ではあったが、若い娘、それに、田舎だけにおいて、一度、東京に嫁ついた姉のところに行ったことがあるだけだったのに、娘を遠い所に、送ることはつらかったであろう。しかし、今更、そんな気弱なそぶりを、見せてはと、思ったのか、励げまして「元気にしっかりやりなさい。先に行って待っているし、心配はない。」と申してくれた。それでも、案じられたのか、ロスアンゼルスに本屋をしている佐藤と云う人の家族の室に、一緒に、いれてもらい、船中も親切にしてくれ、淋しい思いもしなかった。十六日の長い船旅も終り、やっと金門湾に入り、あたりの珍しい風景に、目をうばわれている間に目的の地に着いた。これから新しい生活が、はじめられるが、何もかも、わからず、一切をまかせ、共に出来るだけ強く、歩んでいきたいと思った。

今迄、日本着物に袴と云う格好だったが、早速、デパートに連れられて、洋装に早返り、いよ／＼米国の生活がはじまった。サンフランシスコでは、東ヶ崎菊松夫妻の一室を借りる事になった。この時の印象は、一生忘れられぬ思いで、何も知らぬ者に、親の様な、温かい愛情で、細かい事まで、将来のためになる様、第一歩から、ひとつ／＼教えて貰った。夫妻は、熱心な基督者ホームで、早くより米国に渡り、食料品を、日本から取りよせて、消費組合と云う貿易商をしておられた。千九百十五年は、パナマ運河開通の記念のため、金門湾の見晴しのよい場所に世界博覧会が開かれた。目をみはるばかりの広大な規模であった。

十一月十日長男正典が生れた。この時も、東ヶ崎で、お産をして、少しも不安がなく、何もわからないので、一切のお世話になった。育児の事も、種々教えて貰ったので、病気もせず、はじめ母乳だけであったが、不足の様なので、牛乳を足したら、発育もよく助かった。甲賀は今迄の青年会の仕事をやめて神学校に入って、勉強し、直接、伝道したい希望があると云った。その時は、次の子が妊娠中であつたので、オークランド、メンローズの友人宅に家を一ツ造って、子供と私とが住み、夫は、十六年の九月から、学校の寮に入る事になった。

十七年一月八日純男は生れた。その頃、正典は十四ヶ月でまだ歩けず、パパは土曜日に来て、月曜日に学校へ帰ったが、幸

い、月曜日の朝で産婆はオークランドの町から、電車で来て貰う事になっていた。間にあわないかと、心配していたが、やっと生れる時、かけつけてくれてほっとした。十日程毎日来て風呂にいられてくれ、何かと手伝ってくれて世話になった。パパは二週間休校して家にいたが、二週間すぎるとすぐ学校へ帰った。幸、近くに住んでいた磯川夫人が親切にしてくれ、自分も励げまされ、身体も健康になり、元気を出して、育児に専念する事が出来た。

神学校は五月より九月まで、休暇に入るのだが、大抵の学生は夏期伝道に行く様であった。自分達は其時の夏、ハンホード教会に行った。正典は一年半、純男は四ヶ月、二人を連れて、それぐ荷物を下げて出立した。加州の中部でも、最も暑いところで、日中は仕事もあまり出来ず、涼しいところで休んだりしていった。しかし、久しぶりで、家族一緒にくらし心のおちつき、うれしかった。何より子供等が、暑いところでも、健康で元気に過すことが出来、神様の守りと感謝して九月にひきあげた。信者の家族の人や、青年とも親しくなり、去るのが、惜しい様になった。二年生から sacrament を引揚げて、学校の近くに、小さい家を借りて住み、勉強を続ける様にした。学生の中でも妻子があつて勉強する人が、二、三家を持って暮していた。学校のあるサンアンセルモには、日本人は、学生が三、四人いて、よく遊びに来たが、他は外国の人達であつたが、環境も良く静かで、住み心地はよく、庭も広く

て子供等には、よい処であつた。この家は、パーラー一つ、ベツトルーム二つ、台所、風呂場があり、家具も戸外道具も、一切ついで五弗であつた。となり、老夫婦が住んでいて、言葉をかけてくれた。特に正典を可愛がってくれ、朝食に必らず呼んでくれるので、家で食べて、又となりに出かけ言葉もあまり話せないのに、小さい客人扱いされて、得意であつた。寮にいる学生も日本に妻子を置いている人もあり、かわるぐよく遊びに来てくれ、子供等を可愛がってくれた。ある時は、教授の家で学生を招待してくれ、夫人同伴だから是非来る様に奥様がわざ／＼子供にケーキを持って来て、案内されたので子供を寝かせて出かけた。言葉もよく話せずそんな所は、はじめてであつたが、気まずい思いをさせない様に親切にしてくれたので、楽しいよい経験であつた。

翌年、オーナツグループ教会に招かれた。今井牧師がその間、日本訪問にいった。正典も純男もだいぶ大きくなつたが、この時は、サンフランシスコ迄、連絡船にのり、次には、 sacrament 河を船で上流に登るため、夜、寝台をとつて翌朝目的地に着いた。信者の迎えをうけた。会堂は新しいが、会員も少いので、下が礼拝堂で、後が台所、三階が寝室であつた。こゝも暑いところで、アスパラガスが生産されていた。町には、日本人の店もかなりあつた。日曜礼拝、夜の集会、祈祷会には少数でも、きまつてよく出席され、今でも、そのうちの一人、赤松次郎老は牧師になって、ニュ

一ヨークで良い働きをしていることをきき、喜んでい

七月二十七日三男友信が生れ、信者である沖田ドクター夫妻の手厚いお世話になった。裏の日本語学校で教えていた女の先生も信者で子供等もよくなついていた。夏のわずかな期間であったが、又、別れて学校に帰った。途中、三人の子供を連れてであったが病気もしなかった。十九年四月、やっと卒業することが出来た。

初めての伝道地は南加州ランポーク。こゝは開拓伝道一年して、日本に帰った及川牧師の後であった。この町も、静かな小さい町であったが、酒屋は一軒もないし、遊び場もなかった様である。日本人は大方、農業で、町には、三、四件食料品や雑貨、豆腐製造、魚屋等があった。気候もよく平常は子供等ははだしで遊んで居たり、買物にも行ってくれた。会堂はしっかりとして、牧師館は小さくとも新しく、まわりは畑があり、よい環境であった。十一月三日天皇誕生日には、会堂に大勢集って祝会をした。その夜、三男友信が急にひきつけを起し、驚いて米人医者ハイジェスを頼んで、診察をして貰った。早速、胃の洗浄をしてくれたり、アルコールか何かかぶしたり、やっと、気がつき、もう大丈夫と言われ、二、三日すると元気になるだろうと帰ったが、そのうち、あまり食欲もなく、只、水ばかりほしがっていたが、まだ口もきけず自分達にも小児の病気には経験がないので医者に来てもらい、たずねたら、大病だと言われ、驚いて、手の

ほどこし様もなく、わずか一週間足らずで亡くなってしまった。今迄、子供等は病氣らしい事もなく、こんなに急に亡くなるとは、思いもよらず、もっと何とか、手のほどこし様もあったのではないかと、かわいそうでならなかった。親しくしていた夫人達も同情して慰めて下さったが、心の中が空虚になった様で、がっかりした。初めての伝道地でこんな大きい犠牲を拂うとは、夢にも思わなかった。葬儀は在留日本人も大勢集まってくれ米人のマッケン牧師によって、司式して貰った。心より同情され説教の中で純真な幼児の死は悲しい、短い生涯ではあっても立派に指名を果し、天上に召され、愛されて後より来る親しき者の先導となるであろうと、力強く話された。今迄は此世の事にのみ心を使っていた様であったが、愛児が召され、天国が親しくなり、子供を失くした経験は同じ様な悲しい事にあつた人に心より同情と慰めが出来ると共に子供等に一層の注意が、拂われ二度とこの失敗はさせたくないと思った。今もランポーク丘の墓地に葬られてあるが、訪ずれる機会もなく思い出されるかの地には、戦後日本人は井上雑貨店があるばかりと言うが、その家の長女が召された時、甲賀が葬儀を司どり、同じ経験があり、其家人が友信の墓は、よくしてくれているとの事、正典、純男が再渡米して、親しく墓参りしてくれ何よりの慰めとなっている。

翌年一月十七日長女喜音子が誕生した。今迄淋しかったが、初めて、女兒が与えら

れ、明かるくなった。憐りの米人チャーレーの家の老母がわざ／＼お祝いに帽子と靴下をあんでくれた。娘の使った乳母車があるがよければと、云われたので、喜んで貰った。新品同様に藤の立派なものであった。正典は毎日遊びに行き、家族同様に可愛がられ、私共にも、何かと親切にしてくれた。米人教会の婦人会の人が来て、ベビーのお祝いに、旧新約聖書を贈ってくれた。

其頃、少し離れていたガタルーパーにも、伝道に行っていたが都合でそちらに移る事になったが、ランポークには続いて伝道出張にも来る事にもなっていたが切角、親しんでいた人、特にとりよりのチャーレー一家は別れを惜しんでくれた。ガタルーパーは、やはり農業する人は多かったが未だ会堂はなく、普通の住居を借りてははじめ、信者は少いが一生懸命遠い処にも出かけ、集会もして喜ばれていたが、佛教会があつて盛んで困難であった。そのうち、ワッソンビル教会の招きで行く事になった。サクラメントには、姉が五十歳に結婚して住んでいた。東京の浜田病院で産科を学んでいたので、妊娠中の私は子供を連れて、お産のすむ迄、世話になり甲賀は一人、ワッソンビルに先に行った。この地は、加州の首村で暑いところであったが、恵美子は七月一日生れ、姉の温かい心盡しで安心して養生が出来、一ヶ月後にワッソンビルに迎えられた。この教会は沿岸でも有数の会員が揃っているし、集会も盛んであり、婦人会もなか

／＼よくやっていた。

正典は小学校に、純男は米偉人の幼稚園に世話になった。千九百二十三年一月三十一日遜が生れ、翌年四月、光子が与えられた。二人共、長老渡辺ドクター夫妻のお世話でお産をした。帰国はよく、冬も、クリスマス頃も雨も少し、朝晩にストーブをたく位で、四月から十一月頃迄は全く雨を見ないので、たいていの日本人がイチゴ造りや、リンゴ栽培をしていた。イチゴは年四回の収穫で立派なものが生産されていた。

ホード自動車教会の伝道用にあつたので、夜の集会や訪問にも一緒にのっていった事も度々あつた。近くのサイナス・モントレー教会とは毎年の様に連合礼拝をかわるがわるして、親睦を厚くしていた。この教会に五年近くいて、種々の経験をしたが、正典は四年、純男は三年、喜音子は未だ学校に行っておらず、恵美子、遜、光子と六人の子供を連れて、甲賀は在米二十年、私は十年の生活をきりあげて日本に帰る事にした。慣れぬ日本での生活は困難であるから、無理をしないで米国で伝道する様申してくれた人もあつたが、子供等にも日本に帰り勉強させて、仿かせるのもよいと考え、長い米国生活であつたので一抹の淋しさはあつたが、決心して八月春洋丸に乗って帰国した。

途中ハワイに寄り、太平洋上のパラダイスと云われたので見物したり、堀真一牧師をおたずねして、大きいパインアップルを頂いてなごり惜しくお別れした。

海は静かだった。子供も元気で無事に過ごした。船はだん／＼祖国に近づき今日は夢にまだみた忘れられない故国に着くと云う日、朝まだ暗く、遠くにかすかに点々とあかりがみえ出し、船中は急にざわめきだして、久々にみるなつかしい陸地がぼんやり島のように浮かんで目に映じ、息をこらしてみても居たら、明けやらぬ大空に、気高い富士の姿があらわれ、かんぱん上の黒い人は、驚きの声と共に、感きわまって、涙がほ／＼を伝わり、嬉しさで、心はおどる思いであった。十年前に一人淋しく渡米したのに、六人の子供を連れ、大家族となって逢う事のできる崑び、何とも云い現わされぬ。やがて船は、岸壁に近づく。そこは迎えの人でいっぱいにあふれていた。目を皿の様に探していたら傘を高くかゝげている父の姿がまず目の中にとびこんで来た。つぎ／＼に親しき人の出迎えに足は床につかない。やっと上陸して皆の元気な様子を目の当たりにみると、何から話してよいか言葉も出なかった。その日のうちに木更津に着いた。母は嬉し涙をかくし、心から喜んで、御祝いの御馳走を食べきれない程、つくってねぎらってくれた。

ひとまず市宿に足を止めたが、子供等の学校の都合で木更津に移り住むことにした。何より悲しく淋しかったのは、九年前迄は元気にして居た義母がこんなに早く私共が帰るのも知らず亡くなっていたのが心残りですまない気がした。牧野両親の骨折りで新築の貸家を見つけ貰い、

皆の新らしいふとん、かやも作って待っていてくれ大助りした。

九日より十一月迄上の二人は小学校に通わせたが、先生の言葉もわからず、かわいそうであったが、友達も出来、遊びにもきてくれ崑んで通って居た。両親は毎日何か持って来て見舞ってくれた。

小林誠牧師は且ては米国で伝道して居られ、先に帰国して居られたがこの方の世話で、宇都宮、徳島、満洲の安東教会を紹介してくれた。外地生活になれているので、安東を希望して十一月はじめ出立した。途中京城に姉の坂口和子の一家が居ったので、久しぶりに逢うことが出来た。二泊してやっと安東の地に着いた。寒い安東の地に移っても子供は病気もせず崑んで居た。クリスマスも近くなると、さすがに寒さは厳しく、ペチカに朝晩石炭をたいても二重ガラスは氷りつき、外は全く見えなかった。人の出入りが多いと温度が下り、満洲の気候になれぬ為、満里子は前年(大正十五年)五月に生れていたのだが、遂いに風邪をひき、手当てをしたがとう／＼肺炎になり、小さくて抵抗力のない為か、それまで一度も病気をしなかったのに、わずか八ヶ月で又も惜しい生命を亡くしてしまい、かわいそうな事をした。今迄考えも及ばなかった事だが、室の中でも、窓側と真中とは温度も違い二階の方が温度が平均してよいとき、こんな事も気がつかず、すまない気持ちでたえられなかった。せっかく神様からたくされながら、この様な失敗を重ねて、お

詫びしたい気持ち、何か張りつめた力がぬけた様な思いがしたが、またも気を取り直し、他の子供に一層心をくばって、成長させなければと祈るばかりであった。葬儀には鴨緑江対岸の新義州教会の菅日出男牧師をお願いした。心からの同情と慰さめとを頂いた。一年中で一番寒い一月三十一日で道路も氷結してかち／＼、パパが人力車に乗り、小さい樞を抱いて焼場に向う。惜しく泣けて、無言のまゝついていった。祖母の亡くなった時、内地に持ちかえり、今は木更津教会の墓に永き眠に入っている。

昭和三年十二月二十五日和彦誕生する。一週間前、賀川豊彦先生の特別伝道が近くの学校であり、盛んな集会できゝに行つて励げまされた。クリスマス生れなので平和の意味と豊彦の御名を一字頂いて、和彦と命名した。たいした病氣もせず順調に大きくなった。

我家の周囲の様子を少し記してみると、右となりは礮業の六角堂、左は岐外科医院、前は日蓮宗の寺、教会は真中であつたが、どこも子供が五、六人づつあつて仲良く遊びに来て、楽しそうに勉強もよく一緒にやつて居つた。米国から持って来たワゲンは珍しく皆で乗りまわしたり、かんけりでかくれん坊の遊びもおもしろがつていた。日旺学校も盛んで熱心に集まつて来た。子供は多くとも相応に手伝いもしてくれ、買物や子守等もやり、忙しい中にも元気に過していった。

三女暁子は六年十月四日に生れた。小

学校の運動会であつたが、親達も見に行つてやれず、楽しみにしていた弁当も、特別のはつくれず、我まんして貰つた。暁子は六ヶ月の時、麻疹から肺炎になり、急に重くて入院し、其の夜はむづかしいと云われたが、何とか助けたいと、夜中起きて御湿布したり、ミルクの中にせんじ薬まで入れて飲ませ一生懸命祈りながら、夜をあかした。朝になりいく分顔色もよくなり廻診の先生もこれなら助かるかもしれぬと半信半疑で申されたが、幸い、ぐん／＼よくなって八日目に退院することが出来た。二才位まで腸を度々悪くしたが、たいした事もなく成長した。

翌七年十二月二日に道生が生れた。聖句の中にある道なり生命なりと云う箇所を取つて命名した。七月末梅雨期のむし暑い時に人工栄養で消化不良になり。下痢は続き医者に診て貰つたが、なか／＼よくならず、衰弱もひどく医者で紹介で、満鉄病院に入院した。早速ぐったりした幼児に酸素吸入を夜中続け、一時も油断は出来ない状態であつた。もはや絶体絶命、一心に神様にお祈りも、いやされん事を願いつゝ顔をみつめるばかりであつた。あたりの人もとても助かるとは思わなかつたと後で申して居つたが、やつと死期は脱した様であつた。家の方はパパに他の子供等を頼んで道生の看護に専念した。十日位して、元気は出て来たが、とう／＼一ヶ月位かゝり、痩せた幼児を抱いて家に帰つた。大病したので発育も遅れ、二十ヶ月になって、やつとよろ／＼歩きが出

来た。翌年も肺炎になり入院、長くかゝらず、退院出来たが、他の子より注意しても病気になった。六才位の時は百日咳から肺炎、この時も入院し、遠藤医長も手こずる位なおりにくく、幾日もかゝって危いところをいやされてほっとした。小学校も低学年の時はよく学校も休み、中学に入る様になってすっかり健康になり、其後は家中で驚く程の身体になった。

昭和九年二月四日春明誕生する。正典、純男は中学、喜音子は女学校、恵美子、遜は小学校、光子は幼稚園、他は家に居り、十人の子供等も家はごった返しの有様、それでも皆、学校も休まず、気持ちよく手伝ってくれた。パパも健康で、伝道にさしつかえなく、長女喜音子は母親の大切な補助者であった。子供等の丈夫な時には、毎週とは行かなくても、信者の家庭訪問もしたり、夜の集会の時には上の子供が見てくれるので、出席も出来た。子供の健康のため、スケートを奨励し、学校では体育の時間、小学校も女学校も必修課題になっており、はじめはよく下駄スケートと云う簡単な物でその後、小学校でも、本スケート競争用の長スケートをはいて元気に寒い戸外ですべった。鴨緑江にもスケート場が出来、毎年開かれるのが例になり、かえって冬が待ち遠しく楽しんで来た。町の大人もその時は、応援に出かけ、選手達は信州の諏訪湖に出かけても満洲から行った者が、大方優勝をして帰って来た。

毎月二回の婦人会も少し離れている六

道溝等に行く時は二人位子供を連れ、哺乳瓶を二本位持って、満人の馬車に乗って出かけたが、大人しく夕方帰ったりすると、上の子供等が帰って買物をして食事の用意もしてくれて、楽しく夕食も出来た。風呂もたいてあり、教会の御用に皆で協力してくれ心配なく出かけられた。

正典、純男は朝食の支度も弁当も作って出掛け、他の子もそれぐ食事もすませて朝の忙しい時も順序よく運んで行った。日曜日は寒い所なので子供等の来る一時間前に石炭でダルマストーブをたき室を温め、集会の準備をしてくれたが、これは引き続き遜もやってくれた。それに週報も土曜日学校から帰ってから、信者の元に配って案内をして、和彦等もよく、やってくれた。

安東は満洲では日本に一番近く、気候もいづらか温かったので、鎮江山には四月末の天皇誕生日頃から、五月一日安東デーにかけて吉野桜が満山を雲かかすみ様にかざし、頂上の見晴台からは、雄大な鴨緑江の流れがあり、その上には安東と新義州をまたがる大鉄橋がかゝっており目を遠くに転ずれば、朝鮮の山々がうっすらと絵の様に映じて、いつみてもあかね眺めは満洲第一の景勝地と云われて居った。子供連れの家族や、学校の遠足にもよくこゝが選ばれて、楽しい思い出となっている。正典、純男は中学時代、隣の壱岐一郎君や、緒方君等と朝鮮の白馬にキャンプに行った。テントは正典がミシ

ンをかけて造り、食料を持って出かけ、二、三泊した。その間にパパは小さい子供を連れて訪づれ白馬川で皆で泳いだりしたこともあった。

正典も中学を卒業した。彼は工科を希望して居た。種々考え、米国には五十嵐一家が居り、渡米させて勉強したら、と申ししてくれたので、その頃、下の春明は、一月生れで未だ乳幼児で手がかゝったので、喜音子の女学校の夏休みになるのを、待って、道生と二人を置き四才の暁子を連れて、自分は八年ぶり正典を送りながら、東京にいる両親を訪問も兼ねて出立した。

正典も日本に帰り英語を用いる機会がなかったが、思いきって sacrament 市の姉の家を目ざして行くことになった。正典はまだ十八才八ヶ月の若年で初めて親兄弟と別れて一人遠い米国に行く事は淋しいだろうと思ったが、姉の家には、年のあまり違わない男の子三人と女の子一人も居りにぎやかで五十嵐兄も崑んで、迎えてくれ、私共も米国には知人も多いので、将来のため躊躇せず、当人も進んで決心出来た。そして、しっかり勉強し兄弟の為にも力を出して、両親を助けると云ってくれた。牧野の祖父母も淋しそうではあったが、励げましてくれた。横浜には牧野伯父達と私は暁子を連れて行ったが、船中には入らず、別れる時、正典は少し淋しそうであったが、しっかり手を握り、私も励げまして涙の出るのをおさえて送った。翌年純男も卒業、彼は英語が好きであったので正典の後を追って渡米する事に

なり、相方が力を合わせてやったら、心強く、かえって都合もよくなると思ってやった。純男は木村熊次郎伝道師が再渡米するよい機会に五月頃一緒に行く事になってこの時はパパが送っていった。渡米後二人共姉の子供と兄弟同様仲良く高等学校よりカレッジ迄進み、その間、学校から帰ってから、日本語学校を教える手伝いをしたり、夏は果樹園にも少しは出かけた様であった。其後も相互助け合って勉強した様である。

上の二人の渡米後、崑音子は女学校を卒業してから弟妹が沢山で、手がかゝるので、どこにも勉強に出せず、家の手伝いをしたり、特に洋裁も習いに行かず、家の者の着る物を引き受け、大方「婦人の友」を読んで数多くぬううちに自分のスーツやオーバーも手がける様になった。家の方の弟もまかせてよくやってくれ、どんなに助かったか知れず、後に武田と結婚し子供が与えられても、娘時代の経験が役にたち、困難な境遇にも切りぬき、現在は釧路で夫を助け、女の子四人の母として家庭の大切な仕事に携わっている。

恵美子は小さい時から優しく弟妹の面倒を見てくれ、姉と共に、母の助けとなってくれ、卒業後、東京の弟が医師で開業して居り、母が手放してよこさないかと申されたので、友人と一緒に上京した。母も八十才迄家のためよくつくし、信仰も持ち続けておったが、ぜんそくがひどく遂に帰らぬ人となった。戦争ははげしくなり崑音子は結婚し、私も過労のため、健康

がすぐれぬので恵美子に帰って貰い、一緒に引揚げの時も彼女のために家中が力づけられた。

遜は電気科を勉強する為上京し、卒業後、安東に帰って、家から電々公社に勤め、十九年戦地に行き、北満の方一線迄進み、危いところで終戦になり、途中苦労して我家に帰り、前の勤めを続け、家の大切な柱となって、両親・妹・弟のためつくしてくれた。

光子は元気な性質で丈夫に過していたが、女学校三年の時、肋膜炎になり驚き、入院。其時も私がつきそって看病にあたった。幸い一ヶ月位で退院できた。よく注意したためか、一度も再発せず健康になった。二十年の七月、石川寛と新京で結婚した。

戦争はだん／＼烈しく、あまり良い知らせはなかったが、勝つまではと物質が窮屈になっても頑張った。が、八月十五日天皇陛下の終戦になった事のラジオ放送を聞いた時は、ぼう然としてこれからどうなるのかと、がっくりした。特に外地にある者は今迄この地を生活の基礎として暮し、内地に帰って暮す事等、考えもしなかっただけ、やり場の無い気持ちであった。引揚の事もいつの事かわからず、国民党が入って来るかと思うと、人民軍に官庁も会社も満人になり、日本人は恥もなく持ち物の売り食い、それが出来ればよい方で身体一つで逃れて来た何万と云う老若男女子供は今迄どんなぜい沢な楽しい家庭を持っていた者も、住む家もなく、

食べて行く方法もないまゝ、子供を背に負い、寒い街頭で物売りをしたり、男は軍に連れ去れてつらい仕事をし、若い女は隣組を通して、中央軍の負傷者のため看護婦に召集され、知らない土地にいつ帰るかわからないので、親しい者との別れを惜んで涙ながら手を振って行くのがかわいそうで、この時つくぐ敗戦の為、外地にある者のみじめさを感じさせられた。尚、北満から身体一つでのがれた人々は身のまわりの物を着たきり、若い婦人は途中ソ連兵に見出されて、つれ去られる危険を恐れて顔も真黒に男装している人も多く見られた。家の恵美子、暁子も看護婦に出される恐れがあったが、中共の女官で中共に協力して翻訳の仕事をしていると云う証明の為、のがれる事が出来た。その他の知人の家ではかなり大金を出してのがれたものもあった。一時無警察の状態であったが中共軍は日本軍や財閥は敵だが人民はにくまないと云って保護してくれた。教会堂を中共軍の学校に使用され牧師館の二階で日晷礼拝は続けられ、引揚迄、休みなく出来た。他の人は中共軍の宿舎にと引越しを命ぜられ、七回も八回も行く先も目当てもなくとも出て行かなければならないので、せまい所で幾家族も頼り合って暮してた。私共はその点ものがれてよかった。子供等の学校は終戦と同時に閉校となり、丁度一年、きまった勉強もあまり出来ず過した。遜は心配して自分は少し後に残り、一人なら何とかして帰るから、先に帰ってくれと申

し（困っている者から先に安東から奉天を通してコロ島から帰る事が許されて少しずつ帰れる様になった）二十一年九月末、鴨緑江からジャンク船に乗り、仁川まで行く事になり、リュックサックと手荷物だけに着がえと食料を入れて乗艦した。船内はぎっちり横に寝たり、足を入れるすき間もなく、自分の頭の上には他人の足がつかえる状態であるが帰りたい一心で我慢して居た。武田一家は十月に奉天を経てコロ島から引揚げたが妊娠中の崑音子は崑美恵を負うて、途中歩いて歩いて髓分苦勞した様で私等も心配で無事な事を祈ってたが故障なく武田の郷里に落ち着いて登崑恵が生れ、こんなに嬉しい事はなかった。終戦と同時に通信もできず、光子とは結婚式の時新京で別れたきり、少しも様子がわからず、相方が引揚げて大分後になってから消息が分かった。

引揚船はジャンク船で船長も働く者も満人ではあったが、親切でしっかりして、心強かった。鴨緑江を九月三十日に出航し十二日目にやっと仁川港に着いた。其の時は食料も極度に欠乏し、皆、空腹で疲れ、こんなつらい思いをしたことはなかった。夕方入港し、パパや二、三の代表の人が通りがりの鮮人の船に乗せて貰い埠頭の米軍に行って頼み、その日のうちに上陸を許してもらわないと病人が多く出るからと嘆願した。許可され早速迎いに来てくれ、温かいうどんをふるまってくれ、これで一同元気になり、その夜、貨車で京城に向った。龍山駅に着いたが

日本人には電車にも乗せてくれず一里以上の道を荷物を持って、長い列を作って歩き、幾日もろくな食事もとって居ないので疲れ、やっと元本願寺の跡の建物に落ち着いた。こゝでは八日間も検疫を受けたが、裏の暗い室には重病人が居り、毎日の様に故国の地をあこがれつゝ死んだ人もあり、気の毒でやりきれなかった。この辺は小高い岡で見晴らしはよく眼下には市街が見渡され、かつては威容をほこった總督府の建物が特に目に止り、近くには京城神社の広い境内があり、その廻りの静かな場所にはこゝを永住の地と定めていたであろう見事な日本人の家がある。その頃にはもう韓国人がゆう／＼と住んで居り、帰りにその辺を歩いて通った時は、情けない思いがした。京城の駅から貨車に乗り釜山に着いた。こゝは倉庫跡で下はコンクリートで敷物もなく、寒さに震えながら、一枚のオーバーにくるまって一夜をあかした。それでも長く止められる事がなく、翌日大隅丸に乗せられ一路なつかしい故国に行ける事になり、嬉しく元気が出た。この船も引揚者のため改造されたもので、暗い、広い船底の様なところに大勢で不自由ではあったが、やむを得ず、それでも日本に近づいたので博多に上陸する前日には久しぶりに別れを歌ったり、元気を出した。博多迄一ヶ月近くもかゝり、十月二十七日朝に着いた。午前引揚者は荷物も身体も消毒の薬 DDT をかけられ、やっと引揚列車で各国の故郷にたつた。途中、広島原爆の跡はひ

どいのに驚いた。ところぐ枯木がひよろ／＼と立って居るばかりで、家らしいものもなく、遠くかすかにあがりが見え、まんたんたるものであった。やっと両国駅に着いた。本所も戦災で焼け、パパは子供と戸枝を訪ねたら焼野原に土蔵だけ残っていたと申して帰って来た。十月三十日木更津駅に着き、子供の頃よりの親友の玉屋にリックサックを肩にモンペ姿で身を寄せた。その日のうちにパパだけ市宿に向い、二、三日して迎えに来てくれ、子供等を連れて行って貰ったが恵美子が発熱し、診断の結果、ジフテリアと云うので藤代耳鼻科に入院私も看病した。一週間後、市宿に行き、こゝで二ヶ月半止まった。春明はこの田舎の小学校に入学、後の和彦、道生、暁子は学校にも入れず、やはり木更津へ出なければならぬので、パパはこんな場合、やむなく高野組の通訳をなつて田舎を引揚げ木更津に居を定めた。木更津に移って早速暁子は女学校二年、道生は中学校一年に、春明は小学校六年生となった。和彦は旧制都立高校に入れることになり、恵美子は赤羽の弟の處から、是非来て手伝ってくれる様、頼まれたので和彦も同家に世話になり、通学することになり、それぐの道に進まれる事が出来崑んだ。その年の十一月名古屋に居った崑音子と崑美恵をあずかる事になりしばらく共に暮した。三月になって米国の正典、純男から便りが届き、嬉しく急に一同元気が出た。早速、手紙を出し戦争が始まってから通信も出来ず心配してた

ので心も躍り、返事を待った。間もなく、便りがあって皆も大崑び、其頃、二人共シカゴに居り、加州大学を正典が工科を純男は文科を卒業し、正典は電気の方の仕事に勤め、純男は、シカゴの神学校に戦争中勉強して卒業後、日本人教会の副牧師として元気にしている事がわかり、相互の無事を感謝した。米国の二人からはこちらの不自由な事を知り、沢山の物質を送ってくれた為、衣類から食料、その頃石けんのよい物がなく洗たくにも困ったのでいつも入れてくれた。米国の心ある人で日本の困っている事を知り、送りたい人の名を知らせて欲しいと云われたと申して、知らない善意の人々からも送って下さった。田舎の小さな教会の婦人会の方々は北海道に其の後移転した崑音子の家にも度々贈られ、手紙をそえて励まし、武田が信仰に入るため、特に祈ってもくれた。婦人会の人の写真も入れてあった。クリスマスには子供に人形や新しい手袋、食料、キャンデーもあり、親切で温かい愛の実行にはどんなに助けられ、心にしみて感謝し、力づけられた。

崑音子たちは木更津に共に一年数ヶ月居り、種々家事を手伝ってくれたが、其間二十三年七月に日頃丈夫な可愛い盛りの崑美恵が疫痢にかゝり、医者に見て貰い、大した事はないと申されたが高熱と下痢が激しく、急に衰弱して崑音子も一生県命手当もしたがとう／＼亡くなってしまった。思えば、元気で可愛い盛りで皆に可愛がられ人気者であった。何でも不自由

な時ではあった崑美恵の為、皆がいつも元気づけられ、明かるい毎日であった。暁子が日旺学校に連れていったり、病気になる前、アメリカから送って貰った赤白のチェックの地で二人お揃いに崑音子を作ってお祭りにも連れて行ってとても崑んでいた。今もあのコンクリートの床を可愛い下駄で歩いてた音が耳に残って忘れられない。名古屋の武田に知らせたら驚いてかけつけたが間に合わず気の毒であった。「崑美恵！なぜ死んだのか」と手を取ったら冷えて堅くなったのに動き出し、一層涙をさそった。純真無垢な幼き者の死は、自分も二人の子を失ったので父母の心は察するに余りあり、私にとっても初めての孫で安東で生れた時は側において介添をしたので一層つらかったし、托された自分等としては、申し訳なく武田達に何ともわびる言葉もなかった。引揚の時、崑美恵を連れて来るのに途中病気もさせない様に切角持って来た物も売って食料を買い与えたりして、やっと故国の武田の両親にあわせて崑ばれたのに残念に思うた。しかし崑美恵が居ったため、親達は励まされ、頑張りも出来たと思うと、尊い天国への道案内の訳も果たせた事は大きな功きとなったと思う。

妹の登崑恵は生後八ヶ月、崑音子は淋しい内にも慰められ、元気を出して何かと偽ってくれた。翌年二月歩行が出来る様になり、少し歩き方が心配なので東京の赤羽の牧野に行って診て貰い、専門の日本大学の診察をして貰ったら、やはり

脱臼してるとの事で田舎では思う様に治療も出来ず上京し、牧野の世話になり、一週間入院して早期治療を必要との事で実行した。退院後、ギブスをはめた子を背に負うて通院し早くなおした。とう／＼完全になる迄続け、九ヶ月目にやっと許しが出た。その頃北海道に渡って仕事を始めた武田が迎えに来て元気に出立した。

遜は安東に一人残り、電々の仕事を続け、其後奉天に移って同じ仕事をして居た様だったが、都合よく帰国が出来七月崑美恵の亡くなる前に帰宅一同崑び迎えた。一日も早く仕事を探すため、上京し、其頃はなか／＼東京都内に入る事が出来なかったが、この時も赤羽の叔父の家に住まわせて貰い、張り切って出かけていった。

木更津は私の生れ故郷で米国に行く迄すごした。引揚当時は身体の具合が悪く、家事をやっても疲れやすかったが、子供の頃からなれた処のせいかだん／＼力づいて少しずつまわりの空地に野菜を作ったり、時々浜にあさり取りに遊びに行きしおかげも心地よくすることが出来、見違える位、健康を取り戻すことが出来た。

夏には東京の親類の子供等が毎年きまって休暇中来て、海水浴等してにぎやかだった。パパの仕事は割合楽であったが、途中から、東京に通う様になり、其時は一番列車が五時発なので、四時頃起きて朝食を大急ぎに済ませ、若い人と汽車で三時間位かゝっていき、夜七時過ぎ帰ってきた。其頃は千葉駅で乗りかえをする時

は混雑して、窓から入らなくては走れない位であったが元気を出して一年位も続けた。いつ迄こんな仕事をしてはと、思い、この際やめて本来の伝道をしなければと、決心してやめた。木更津には三年半住ったが暁子は高等二年、道生は一年、春明は中学三年生であった。

保田の教会の招きで二年近く住んだが石川四郎牧師の紹介で高岡教会に赴任した。北陸の地は冬中雪におゝわれたり曇天続きで老年になってから無理と周囲の者からも心配されたが、この際、及ばずながら導かれるまゝ最後の御用と信じて、道生もあと一学期で高等を卒業、春明も高校二年で学業も途中でむづかしい時ではあったが決心した。

遜は自分の仕事であちこち出張がちであったが、和彦は旧制高等学校から東北大学法科に入学出来、仙台の寄宿に住んだ。暁子は赤羽の家から東洋英和の短大保育科に学んで居ったが遜は弟妹のため、毎月の学費の応援をしてくれた。

道生は卒業後どんな道を選んだらよいかと心にかゝっていたら、思いがけない時「僕、神学校に入って勉強したいが。」と云われたので真に嬉しくて、感きわまった。伝道者の道は険しくとも何よりもこの希望は進めてやりたいと遜にも相談したら、崑んでくれたので、和彦、暁子続いて道生と容易でないと思いつゝも、前進する事により、神様は何とか必要のものを与えて下さると信じて居ったが、遜は自分の事を考えずよく援助してくれ

た。恵美子は女学校を卒業するとすぐ母の居た弟の家に迎えられてよく仕え、そのみならず親兄弟のためにも、心を配って姉として母親の様な温かい気持で自分の事の様に盡くしてくれ、皆から信頼され感謝されて居る。

昭和三十一年八月純男が加州ストックトン教会に奉仕している時、二十二年ぶりに両親訪問の為、来日して来た。パパが羽田迄、恵美子と迎えに行ってくれ、市宿や木更津の墓参りをすませて高岡駅に着いた。手紙の往復はして居ったし、いつ逢えるかを待っていたが、目前に現われた時は夢の様で嬉しくて呆然として言葉も出なかった。純男は日曜礼拝に日本語で説教をしてくれた。彼は生れた時パパの神学校で同級生達が将来直接伝道のため用いられる様、祈ってくれた事が今日迄、神は尊き御守り下されて実現して、何にも震って嬉しく御期待にそう様祈った。教会から一ヶ月休暇を貰って美代子のすゝめで、一人で万障をはいして来てくれた事はどんなに自分達を崑ばせ、慰めてくれたかわからなかった。切角来たので、純男は中学時代修学旅行しなかった。其頃神学校に勉強中だった道生が京都の大宮教会に夏休中、伝道の手伝いに来て居たので、彼に案内させて関西地方を見物させた。八月下旬に帰米するので私が送りに出かけ、純男と和彦も同行して日光に行き、純男と久しぶりに奥日光の湯本に一泊し、中禅寺湖を遊覧船で見物し、楽しい思い出となった。又、いつ

逢う事ができるかわからないが遠く離れても相互が信仰により与えられた御用に励げまん事を願いつゝ感無量であったが恵美子、遜、和彦、光子、道生と見送りに行った。自分達が米国伝道の最後のワッソソビール教会で伝道し、長く子供に恵まれなかったが、帰米後、次々に与えられ、二男一女の親となり、忙しいうちにも元気で居る。自分等が此地を去る時、純男は知らない日本に行く事が不安であったが、僕はジャパンへ行くのは嫌だと泣いたが、再び渡米してゆかり深い教会で自分等の出来なかった事を補ってくれる様で嬉しく、其頃の長老方も今も健在で崑んで応援してくれている。

正典は久子を連れて同じ年の九月に二十二年ぶりで帰って来た。この時は私が羽田に行き、赤羽の牧野に滞在し自分は正典を連れて墓参りをすまし、一足先に高岡に帰り二人を迎えた。長い間、遠く離れて戦争中は音信も出来ず、案じて、居ったが、何等障りもなく、御守り中に目的の勉強もすませて、共にすこやかに相見る崑びを思うと感謝の他にない。高岡には十日間寝食を共にし、長い間の事を何から話してよいかわからず、只、嬉しく過した。迎える時は楽しいが別れる時は悲しく淋しい思いがした。しかし遠く米国にあってそれぐ忙しく責任のある仕事をかゝえているのに、わざ／＼来てくれ、渡米させた時は若く、家から他に出た事がなかったが、五十嵐はじめ多くの人の善意による励げましもあったであろうが、後はそ

れぐの努力で目的を果してくれた事は有難い事であった。しかし、それにも優って神様の絶えざる御加護は何より力強く、遠く離れても祈りによって結ばれ、安心することが出来た。

暁子は幸い、短大を卒業し金沢の幼稚園に奉職、春明は金沢大学教育学部に入學を許され、一年間早朝二人で通う様になった。暁子は其の後、高岡教会の附属保育園に勤めた。熊野先生の御世話で、秋田県鷹巣教会の牧師小林恵一と結婚し今は男一人、女二人子供を与えられ千葉県小金教会で牧師の妻として元気でやっている。

春明は金沢大学を卒業後東京板橋区蓮根小学校につとめ、一昨年多重子と結婚し俊明を与えられ、現在一緒に生活している。

高岡には二十六年十二月はじめより三十六年一月まで約十年種々むづかしい問題もあったが教会員一致して、よく助けてくれてよき解決が与えられ、北陸伝道は困難とされていたが大過なく過ごすことができ感謝であった。子供等の仕事の関係で上京したので、心配してこの際、隠居して近くの東京に出てはと勧めて来たが苦楽を共にして伝道に協力してくれた親しき方々は未だ元気だからとしきりに止めて惜しんでくれたが、やはりいつ迄も続けて老人が腰をすえているより若きよき後任の牧師が与えられたら引退した方がよいと思い決心した。幸い子供等がお世話になっている熊野先生にも相談した

ら、その頃、武蔵野教会の副牧師をされていた斉藤牧師を後任におゆずり下さったので安心した。近年まれな大雪の降り積もる一月十六日後髪を引かれる思いで夜の高岡をなごり惜しく別れた。出立の時は二、三日前から降り続いた大雪で空はどんよりと曇り、別れの挨拶に近くの親しい方々の家に行くのに、モンペに長靴、手には傘を杖にして幾度も雪の上をころんだが高岡に九年以上住んではじめての事で忘れられぬ思い出となった。こんな日にもかゝらず多くの人々の見送りをうけ、何か胸がつまる思いであり、四十数年の牧会生活を最後に何等大した事も出来なかった事を心に恥たる思いがした。夜汽車は一路東京に向って走り続いたが、途中長野あたりに来たら、天気は一辺して目もまぶしい位、太陽はさん／＼と照り、別天地に来た思いがして、北陸とは余り離れていないのにこんなにも違うのかと不思議に感じた。東京は冬は寒くても晴天続きで北陸とは全く反対の様で後に残っている人にすまない気がしてならなかった。高岡を去る前の年には何か健康がすぐれず、思う様に働かれず、医薬に親しみ、東京にいる恵美子に度々来てもらって世話にもなった。そんなわけで、子供等も心配して東京に呼んでくれ、老人が長く病気でもして教会の迷惑になっては済まないとの心づかいもわかった。

結婚五十年過ぎて見れば誠に短い様ではあったが、子供等が今迄歩んで来た経験をありのまま、記してみたらとの希望

で筆を取ったが誠に未熟で恥かしい様である。観みて自分の様な何も出来ない者でありながら、欠点多く、強情で我儘者が今日かくも恵まれて、最も至難とされる牧師の妻として足りないながら、長い年月を一貫して過ごさせて頂き、其の上十二人の子供を与えられ、二人は天上に送り、十人のうち二人は牧師に、娘一人は牧師の妻として御用にあたらせて頂き、後の子供はそれぐの仕事に携わっているけれど信仰を持ち感謝しつつ、社会人として働いている。亡き父が私共の事を遊牧の民のようなイスラエル民族に似て、随分あちこち歩いて暮し、その度に子供を生み、いつになったら落ちつけるかしらと申して居ったが、神様はこの様にして種々の経験を通して訓練して下さった事を思うと共に苦しい時にみことばによって力を与えて下さったり、失望する様な時に思いがけない新しい道を開いて勇気づけ、かえって磊びに変る事をも経験させられた。やはり自分の様な者も神様のお選びにあずかり同じ信仰者と結婚し、信頼し協力した事が今日迄さゝえられた事と思われる。今は六男春明、多重子と孫俊明と共に心置きなく過し、老いても二人共、力して守役の手助けも出来、健康に楽しく過しているがもっと信仰を深め、幾分でも神様に磊ばれる毎日を過して行きたいと願っている。

今夏北陸を訪問し大変磊ばれた。健康が許され機会があれば安東にも米国にも訪問したいと思っている。(あや)